

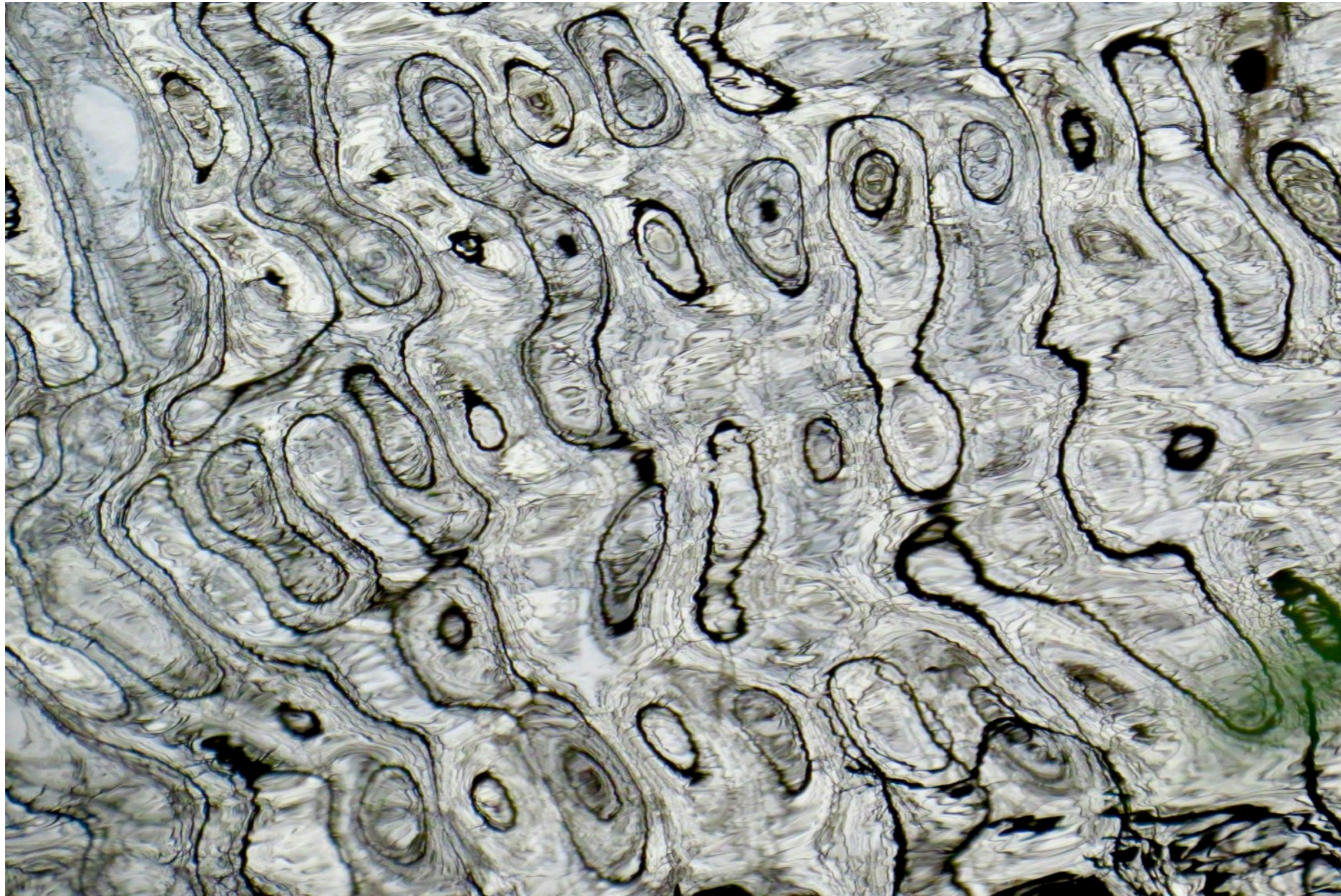
神秘学ポエジー 風遊戯
photopos
124

【神秘学ポエジー～風遊戯 第 248集】 photo ヴァージョン

photopos 3076-3100

《2023.2.9～ 2023.3.5》

神秘学遊戯団



ふつうは
どこにもないのに

ふつうという
おばけがいる

ふつうか
ふつうでないか

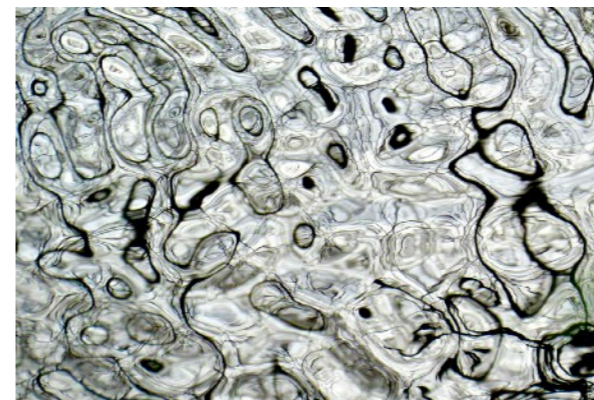
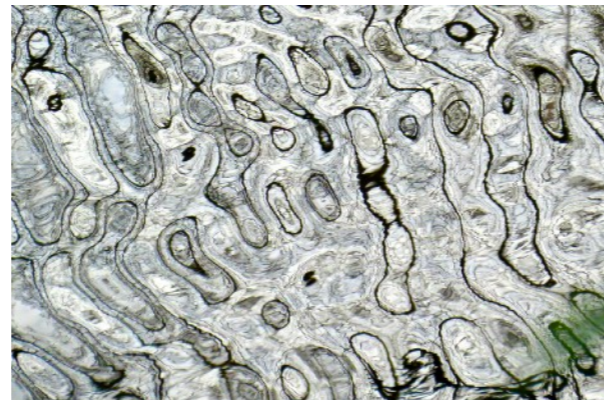
だれが
きめたのか

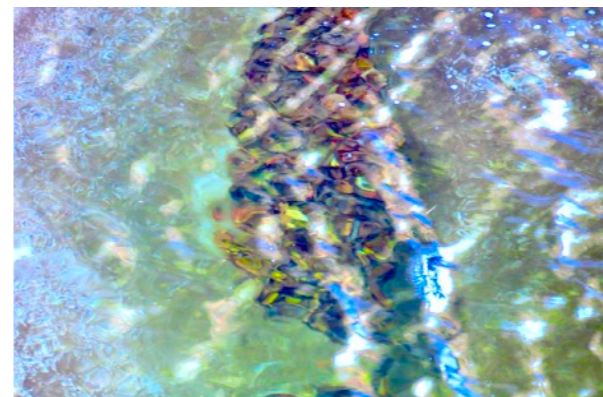
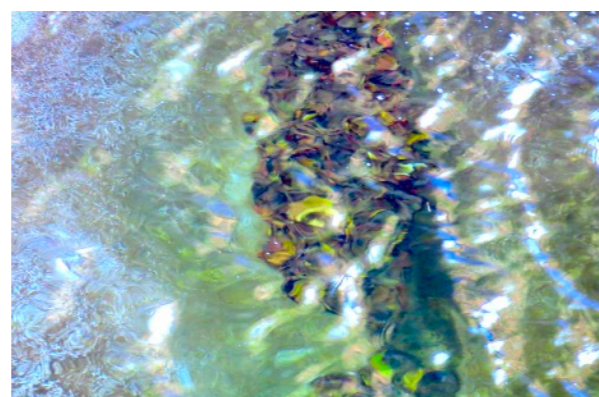
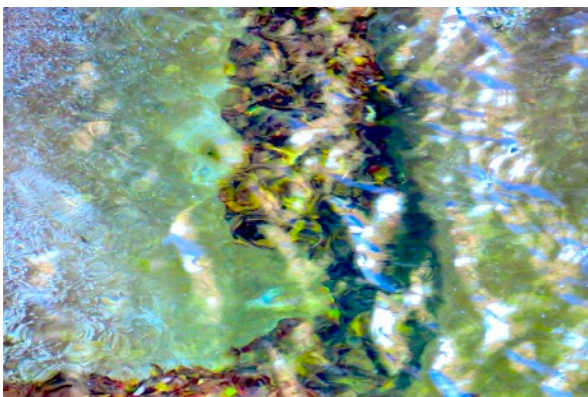
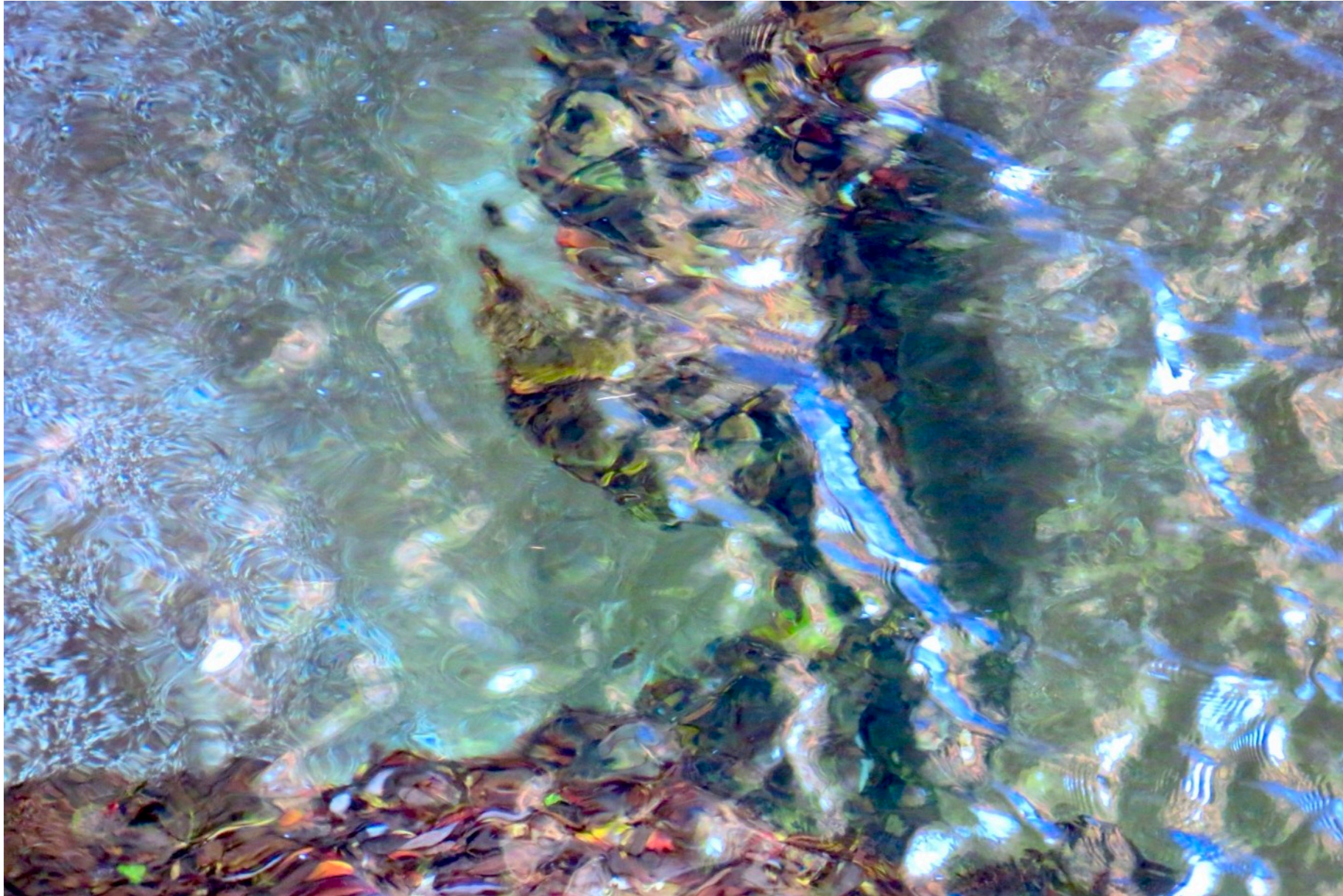
ふつうという
おばけをつくったひと
でておいで

あなたは
ふつうなのか
ふつうではないのか

ふつうとはなにか
ふつうでないとはなにか
こたえよ

おばけを
どこからよんだのか
こたえよ





半分
足りない

鏡にうつる
じぶんを求めるように
あらかじめ失われた
恋人を求めるように
その半분을
求めないではいけない

けれど
それが何なのか
なぜ求めるのか
わからないままに

足りない半分は
影のように付き纏う

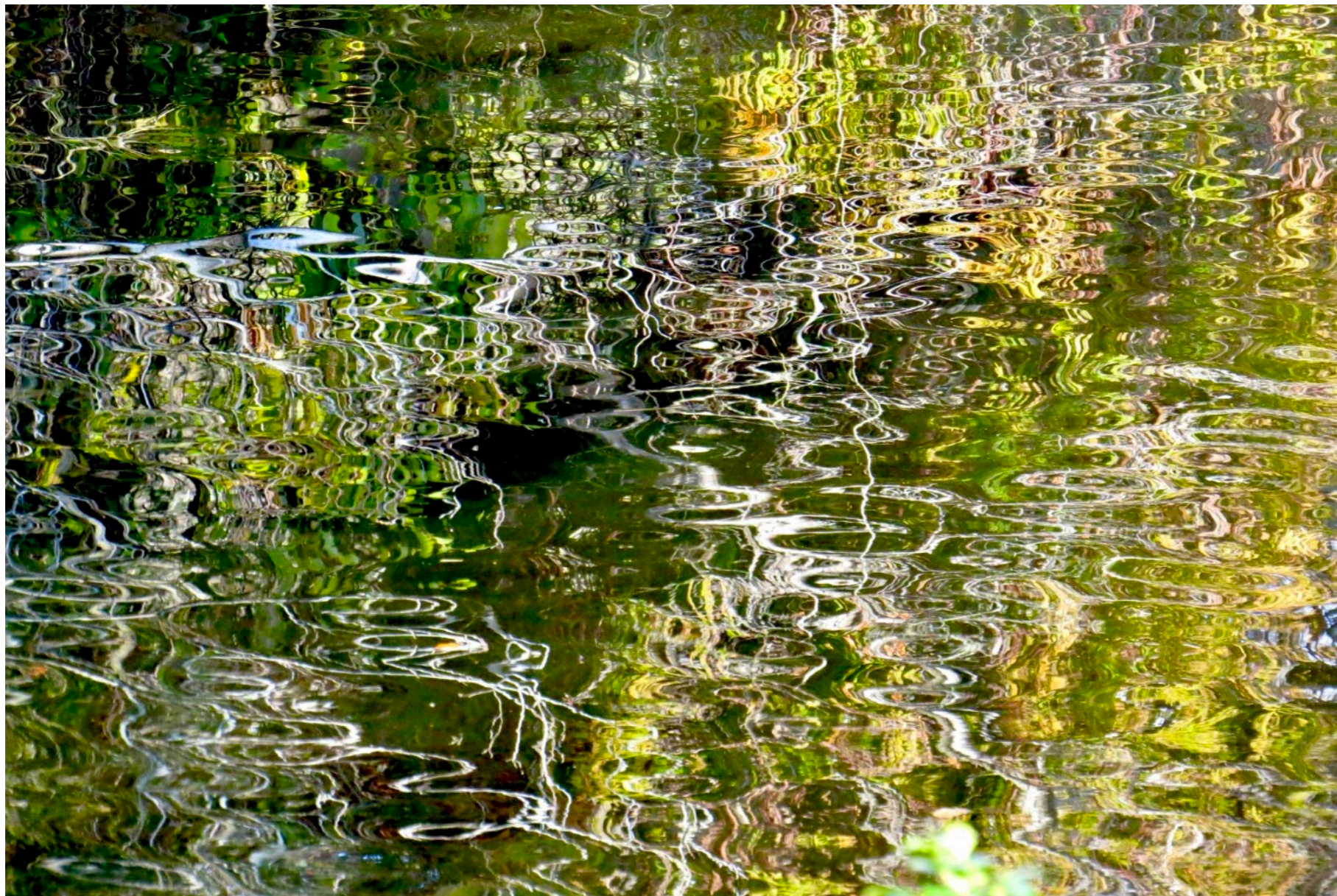
ときには
半분을愛し
ときには
半分に祈り

ときには
半분을妬み
ときには
半分と闘い

足りない半분을
じぶんのものにしようとする

足りない半分は
我が半身である
我が影であり
あるいは我こそが影である

やがてそれに気づき
影をみずからと成し得るだろうか
半円と半円をつなぎ円とすることく



ぼくだけの
言葉はあるだろうか

ぼくだけの
言葉はないとしても

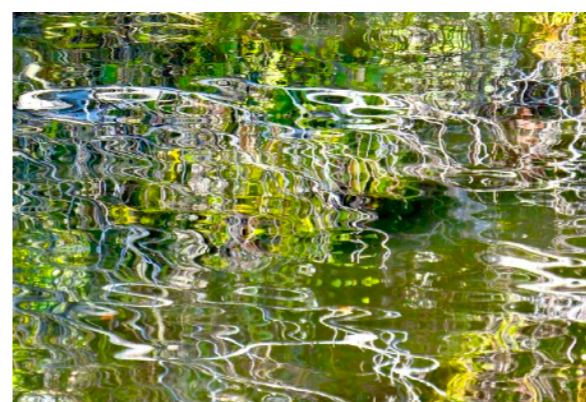
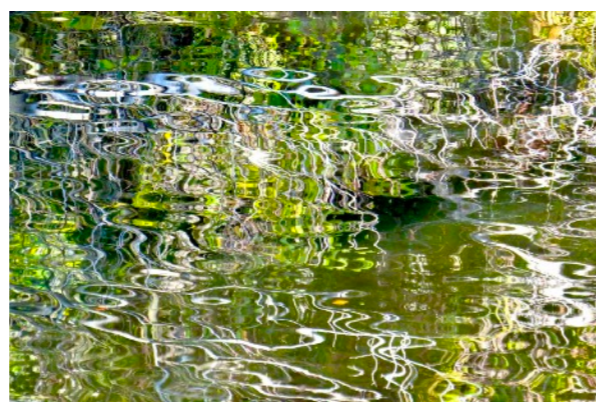
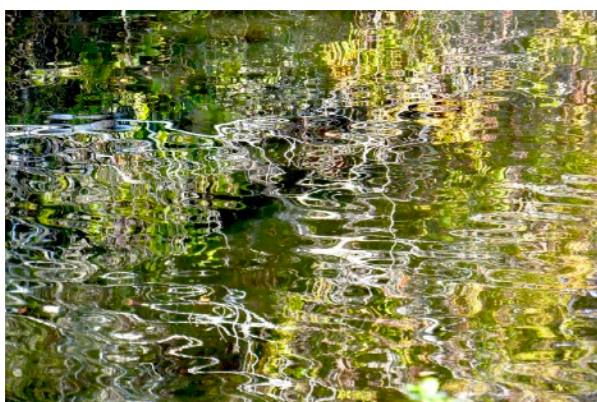
ぼくだけにしか
演奏できない
そんな言葉はあるかもしれないから

ぼくは
インプロビゼーションのように
言葉を遊ばせる

だれかの真似も
してしまうかもしれないけれど

ぼくのなかの
深いところにある
マグマのようなものが噴き出して
ぼくだけの歌になることもあるだろう

マグマの熱に
焼かれないように気をつけながら
ぼくはぼくだけの歌を
ぼくというかたちを超えてグルーブさせる





人を縛る論理は
すでに論理ではない

論理は
人を縛らない
自らが
歩むための道である

人に強いる数は
すでに数ではない

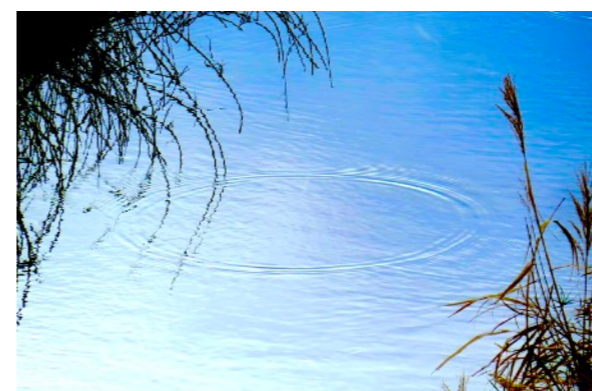
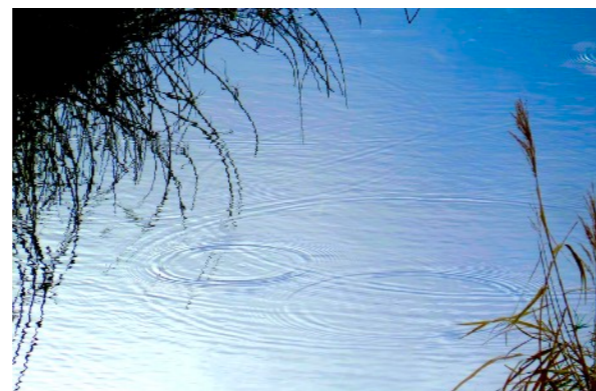
数は
人に強いることはない
自らの
かたちを学ぶ則である

人を苦しめる生は
すでに生ではない

生は
人を苦しめない
自らに
教える愛である

人を閉じ込める言葉は
すでに言葉ではない

言葉は
人を閉じ込めない
自らを
自由へ導く歌である





夢のなかで
現実との境が
わからなくなるように

生のなかで
死との境が
わからなくなりはしないか

生が死のなかで
死が生のなかで
詩を紡いでいるように

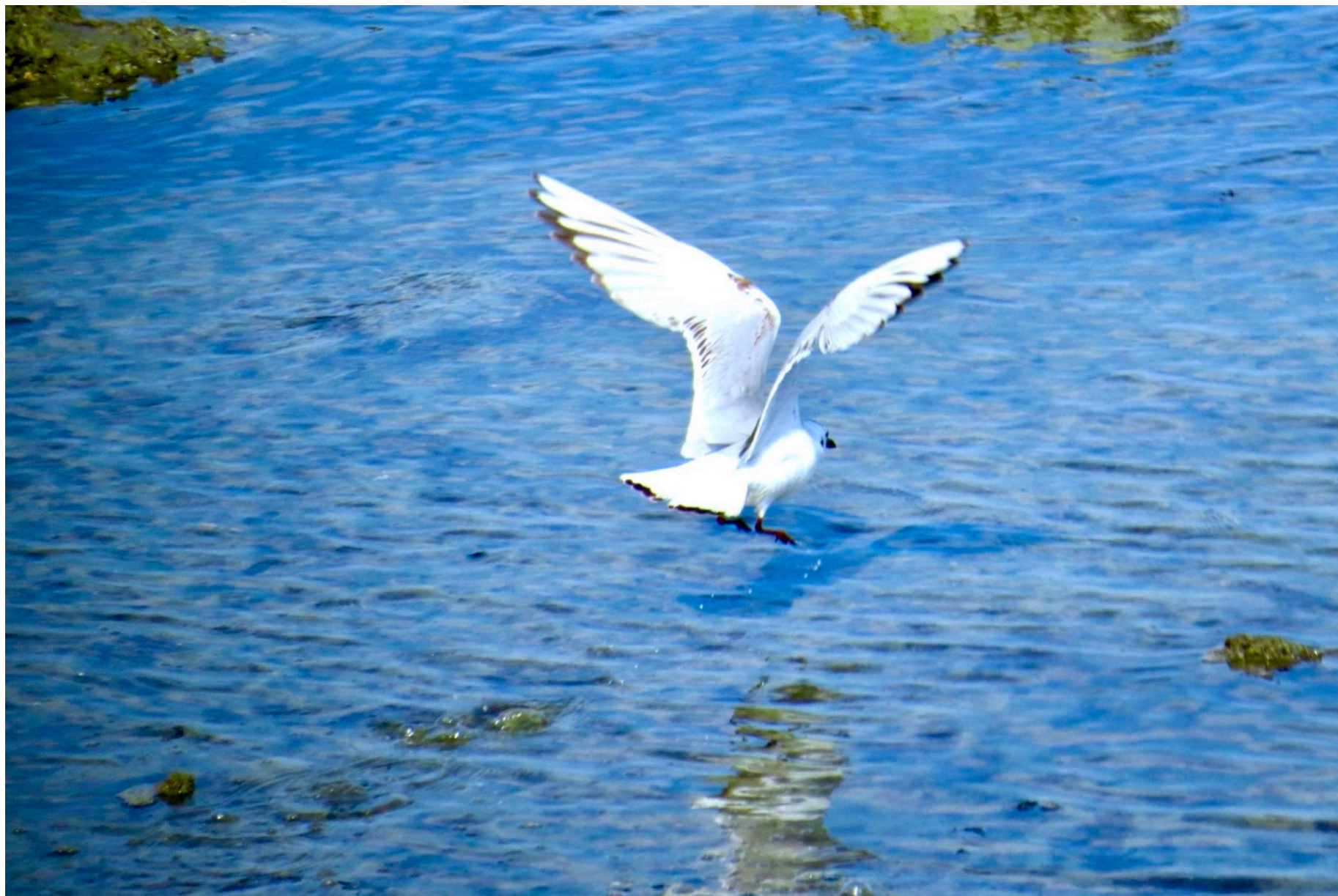
時間のなかで
現在との境が
わからなくなりはしないか

過去が現在のなかで
未来が現在のなかで
時間を紡いでいるように

私でありながら
私でないものとの境が
わからなくなりはしないか

私が私でないもののなかで
私でないものが私のなかで
秘密の歌を歌っているように





翔ぶために
ここにいる

どこに
生まれるか
忘れているけれど
じぶんで決めている

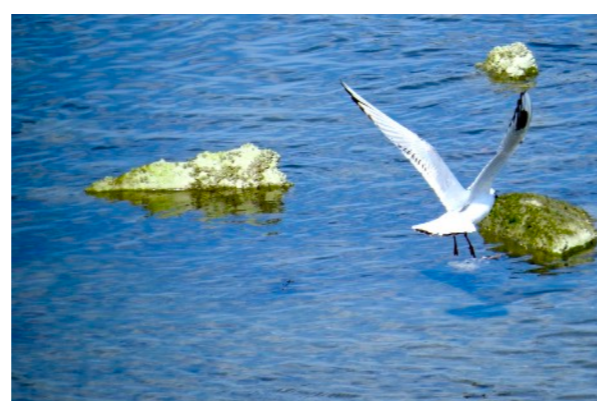
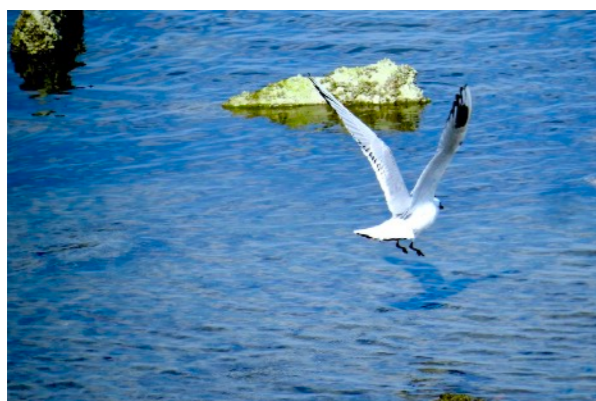
どこへ
ゆくか
忘れているけれど
じぶんで決めている

何を
するか
忘れているけれど
じぶんで決めている

どんな
じぶんでいるか
忘れているけれど
じぶんで決めている

どこへ
翔ぶか
忘れているけれど
じぶんで決めている

翔べるか
いまここで





世界には
果てがあるか

私には
果てがあるか

私はなにを見ているのか
世界の内で

世界の内で
世界の外は見えるか

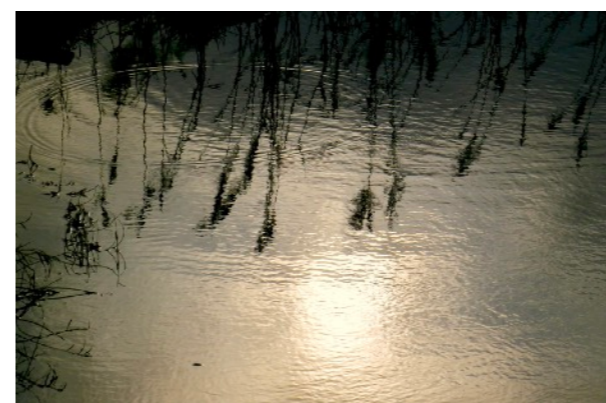
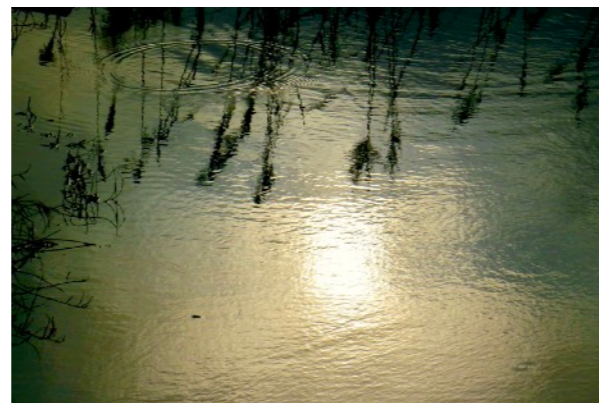
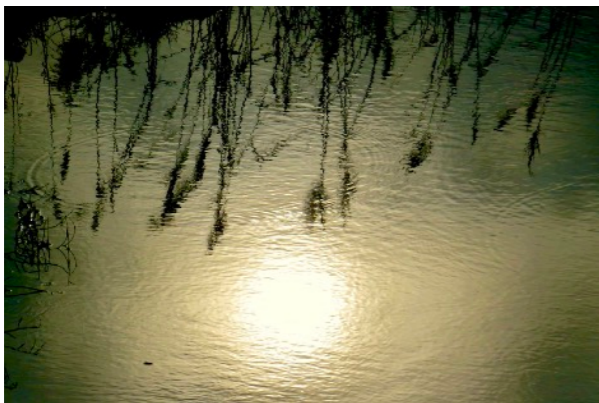
私の内で
私の外は見えるか

私に世界の外から
光がもたらされる

その光を
私は感じとれるだろうか

私に私の外から
風が吹いてくる

その風を
私は感じとれるだろうか



※愛媛県松山市・重信川にて



朝と夜が
繰り返され

光から闇へ
闇から光へ

そのあわいで
光と闇が
交替するとき

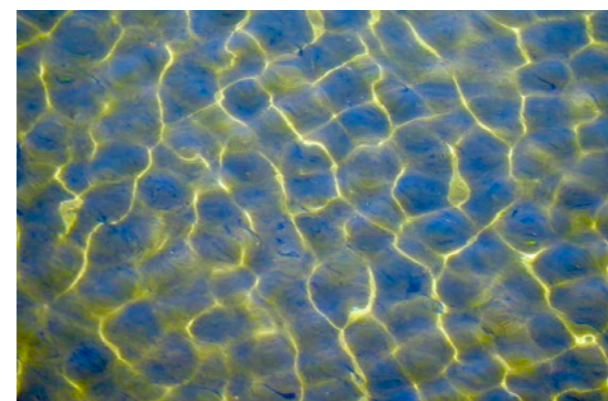
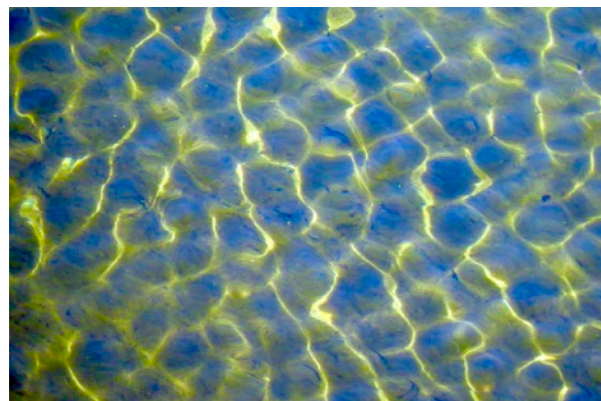
光のなかの闇
闇のなかの光の
曼荼羅が織りなされる

生と死が
繰り返され

夢から現へ
現から夢へ

そのあわいで
夢と現が
変容するとき

夢のなかの現
現のなかの夢の
呼び交わす声が聞こえる





なにを見ているのか
なにを見ていないのか

見ることでしか
見ることは超えられないから
わたしは眼とともにあり
眼を超えてゆく

なににふれているのか
なににふれていないのか

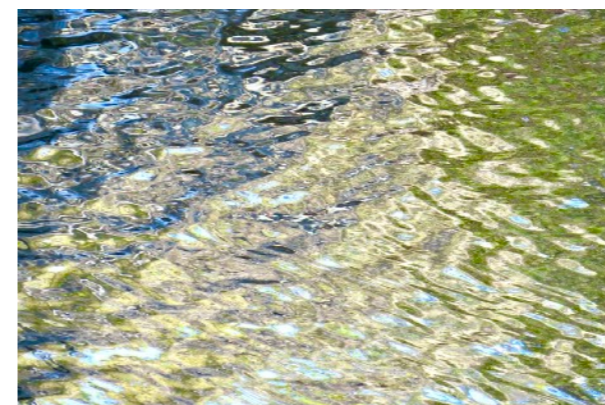
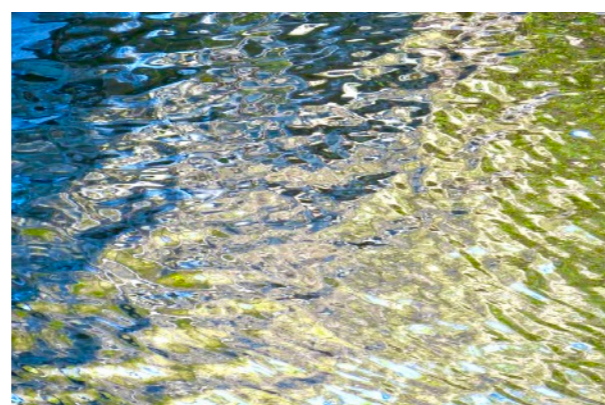
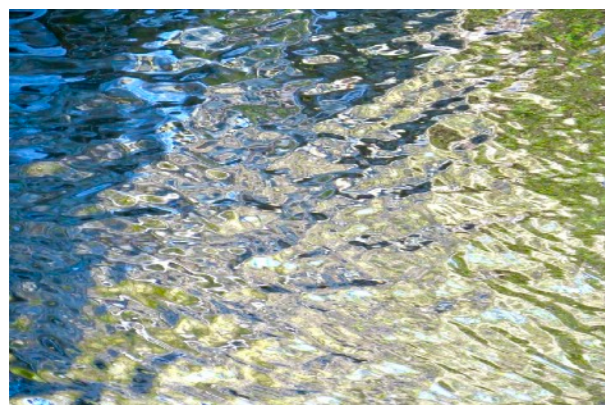
ふれることでしか
ふれることは超えられないから
わたしは手とともにあり
手を超えてゆく

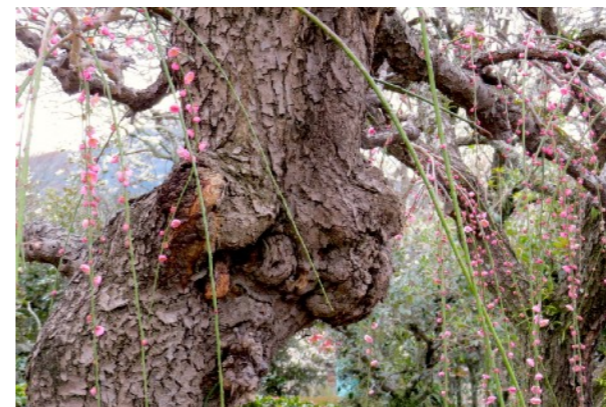
なにを感じられるのか
なにを感じられないのか

感じることでしか
感じることは超えられないから
わたしは心とともにあり
心を超えてゆく

なにを考えられるのか
なにを考えられないのか

考えることでしか
考えることは超えられないから
わたしは思考とともにあり
思考を超えてゆく





意味がない
といっても
意味がないという意味はある

意味とは不思議だ

意味とは何か
と考えていくと
意味とは何か
そしてそれが
どこからやってくるのか
わからなくなる

わからない
ということさえ意味だ
意味を考えると
すでにそこに意味はある

考えるということもそうだ
考えるとき
考えはすでにそこにある

わたしということもそうだ
わたしという
無意識も含めた意識があるとき
わたしはすでにここにいる

わたしがいないとき
そこに世界はあるだろうか
世界がないとしたら
その世界がわたしだからなのだろう

わたしがわたしであるとき
世界もまた世界であるだろう
その世界がどんな世界なのかは
わからないけれど



時の波間に
ゆられてゆれて

ここからそこへ
そこからあちらへ

過去は現在となり
現在は未来となり

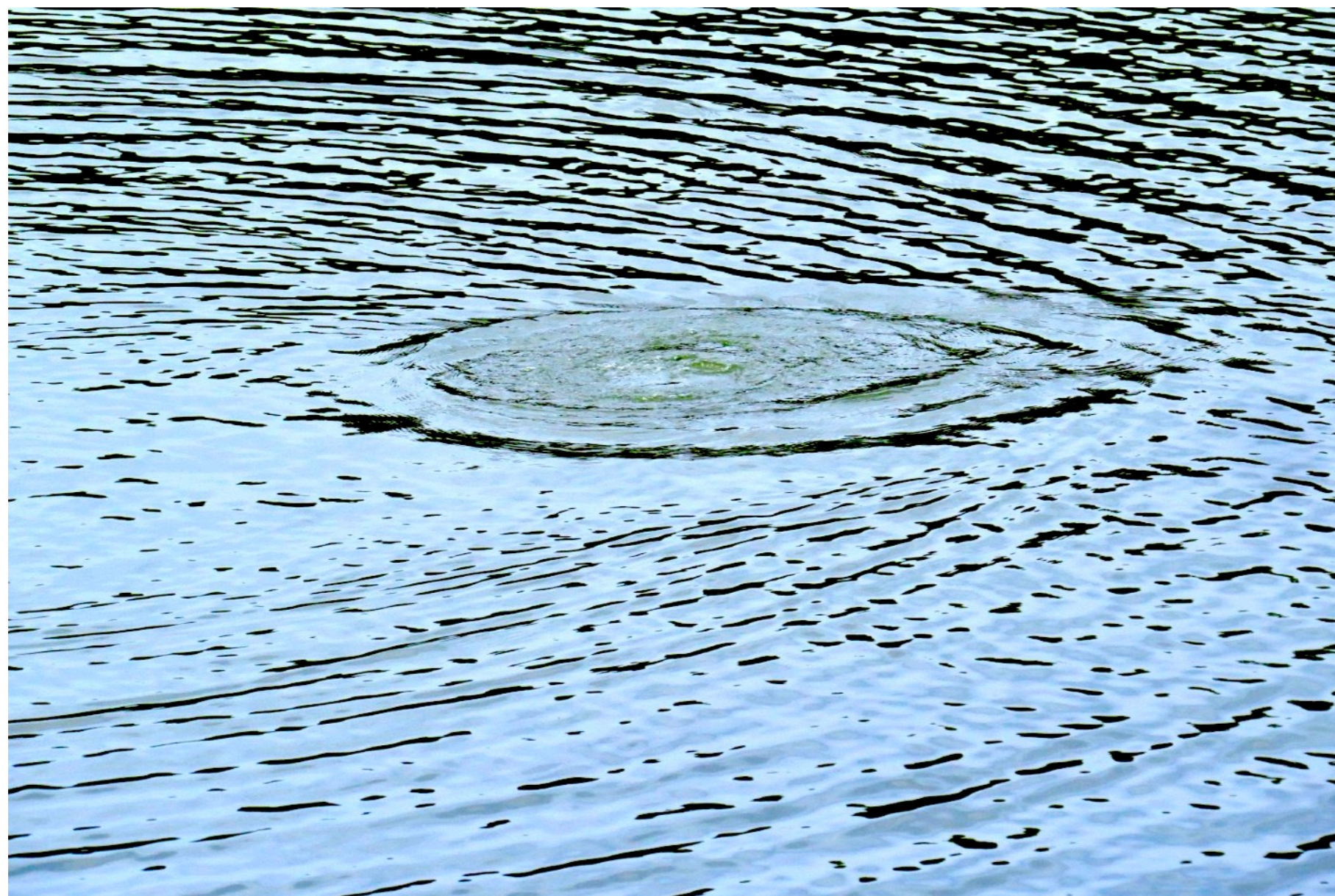
わたしはいつたい
なにを知ろうとし
なにをしようとし
どこへ行こうというのか

ここはいつもここで
いまはいつもいまなのに

永遠の波間で
ゆられているのは
いつたいだれなのか

だれでもないわたしが
わたしとなって
こうしてゆれている





それを
それと名指すとき
それはすでに
それではなくなっている

光は変わりつづけ
影は変わりつづけているのに
それはそのまま
変わらないでいることができるだろうか

変わってゆくものも
そのなかで変わらないものも
たしかに見ることができますように

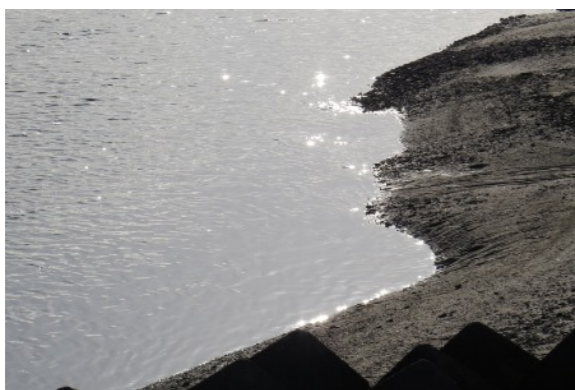
私を
私というとき
私はすでに
私ではなくなっている

あなたを
あなたというとき
あなたはすでに
あなたではなくなっている

私は変わりつづけ
あなたは変わりつづけているのに
私は私のまま
あなたはあなたのまま
変わらないでいることができるだろうか

変わってゆくものも
そのなかで変わらないものも
愛しつづけることができますように





はて
さて

あたりまえとは
どんなまえなのか

わからなくなったときは
あたりでないところを
うろついてみるのがいい

だれかに
きいてみるのもいいだろうが

おそらく
あたりまえだから
あたりまえなのだとか
かえってはこないだろうから

わからないことを
あたりまえにするよりも

ためいきを
ひとつばかりのこして
わからないままに
しておくのがよさそうだ

だれかがかってに
あたりまえにただけかもしれない

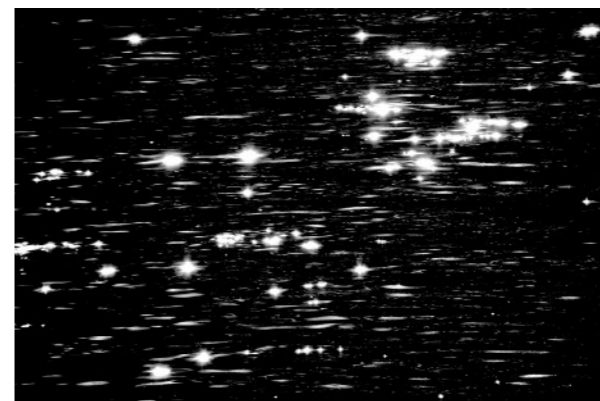
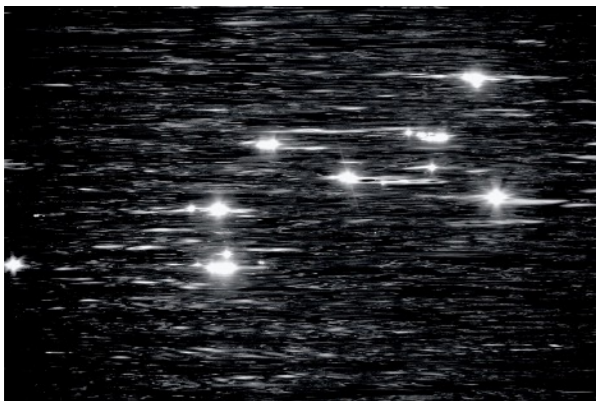
そうでないときでも
うんがよければ
あたりまえのなぞが
とけるときもあるかもしれないから



天邪鬼がいなければ
みんなおなじになってしまう
そんなみんなのために天邪鬼はいる
違うものを
違う仕方で見するために

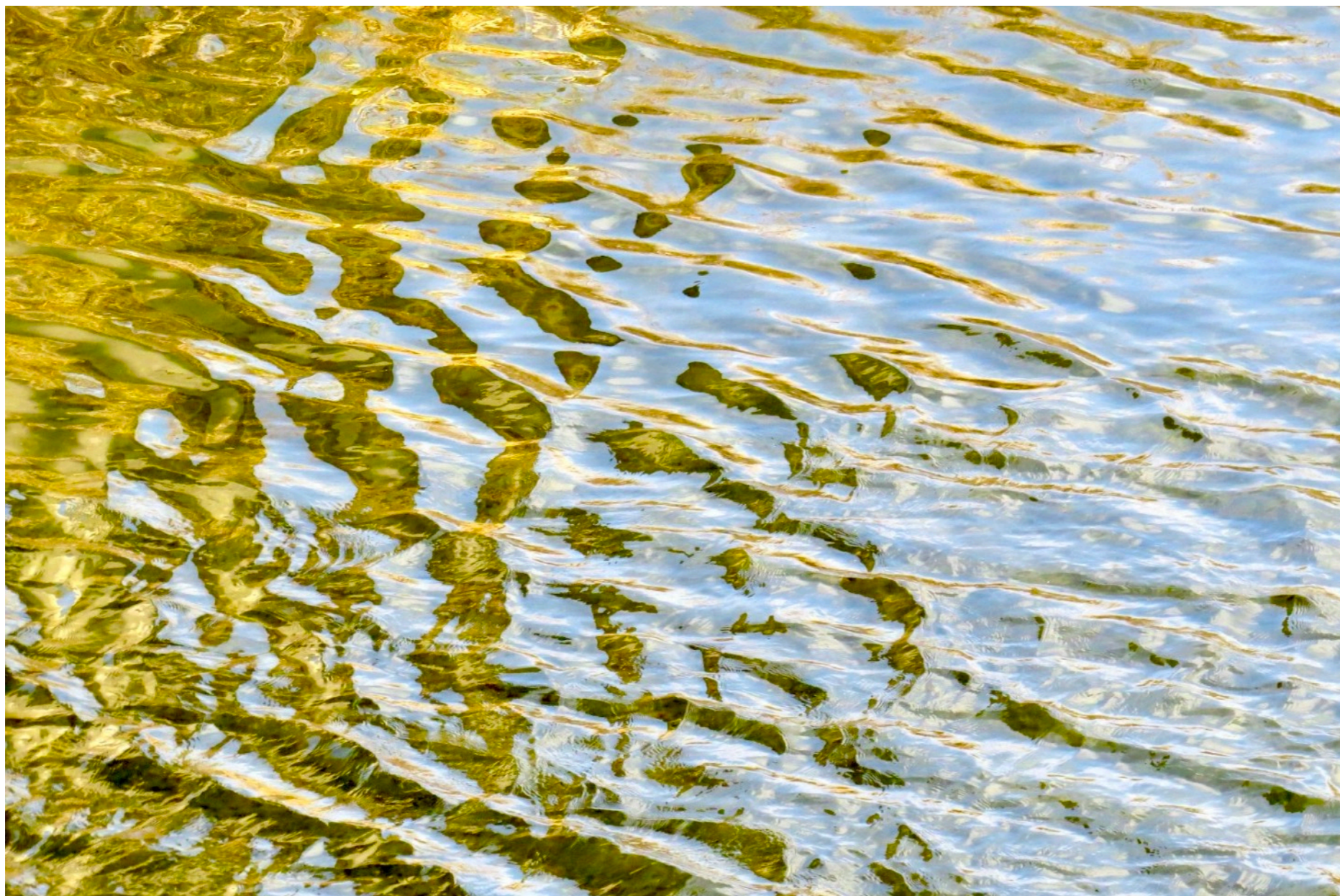
黒い羊がいなければ
みんな白い羊になってしまう
そんな白い羊のために黒い羊はいる
じぶんとは違う姿を見て
じぶんを見直すために

墮天使がいなければ
みんな天使になってしまう
そんな天使のために墮天使はいる
天使に自由はあるのか
そのことを問いなおすために



☆photopos-3090

2023.2.23



死のもとで
生は輝き
闇のもとで
光は放たれ

泥によってこそ
花は咲き
悪によってこそ
善は高められ

愚とともにあり
賢はその歩を進め
穢れとともにあり
聖はその香を放ち

地あるがゆえに
天は広がり
時あるがゆえに
永遠は深まり



※愛媛県松山市・重信川河口にて



遠くをみる
遠くから
ここをみる

そうすることで
みえてくるここがある

はるかな未来をみる
はるかな未来から
いまをみる

過ぎ去った過去をみる
過ぎ去った過去から
いまをみる

そうすることで
みえてくるいまがある

同時代をみることは
いまのじぶんをみることのように
とてもむずかしい

鏡にうつった姿をみてもそのとき
じぶんをみているとはいえないように
ずっとあとになって
はじめてみえてくる姿がある

不易流行は
不易とはなにかがわからなければ
それが易の流行と
どうちがうのかもわからない

わからないときには
ここといまを
彼方とのあいだで
対話させてみる

そうして
別のここといまを
想像してみる

荒唐無稽であってもいい
荒唐無稽こそが
必要なこともあるのだから



ひとは
ひとりでは
生きていけないが

ひととともに
生きていくのは
むずかしい

自律か他律か
ではなく
自律も他律もあり

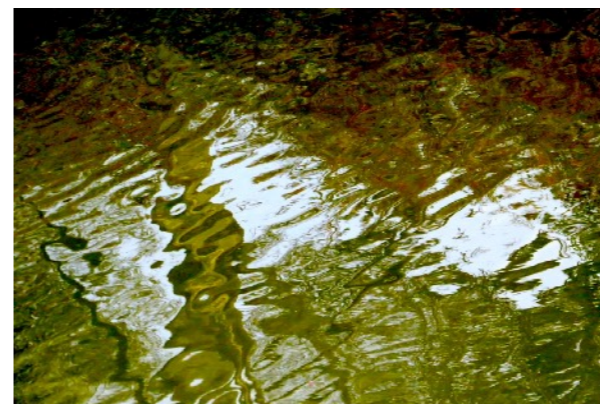
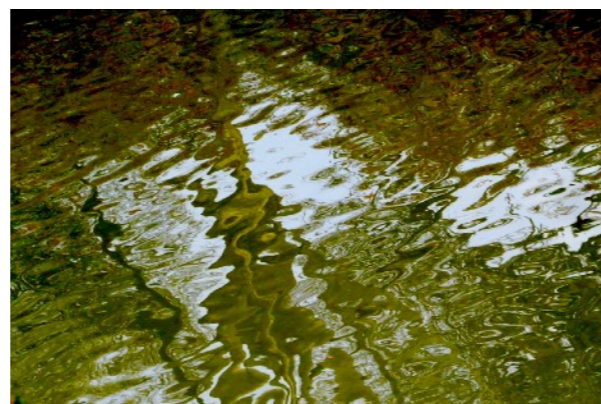
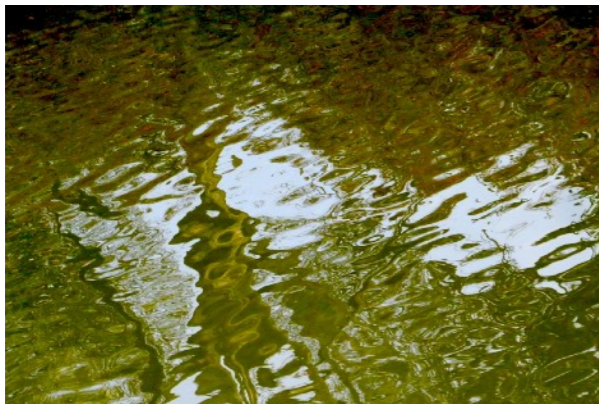
その交わりのなかで
ひとは生きていくけれど
友情があれば
その生は喜びへの道となる

ひとは
友情なしでも
生きていけるとはいえ

友情は
契約されることも
管理されることもなく

いつでも新たにつくることも
また終わらせることもできるような
そんな自由とともにあるから

友情とともに
創造的な関係をつくりながら
生きていけますように





なぜひとは最初から
成人として生まれることなく
育つのに長い時間がかかるのか

やがて高度なAIができたとして
最初にそれをインストールすればいいと
考えるようになるのかもしれないが

そのときすでにひとは
ひとではなくなってしまっているだろう

ひとがひととして生まれてくるのは
愛と智慧を両輪にして歩むためだからだ

ひとは役割を生きている完成した天使ではないから
未熟なからだをもって生まれ
そこから愛と智慧を育てる時間が必要だ

愛することも智慧を得ることも
待つということにほかならない

結果のためではなく
愛することができるまで待つということ
計算できる知識ではなく
知ることができるまで待つということ

最初から完全な真理を得るよりも
間違い続けるかもしれないなかを
みずからを真理への道として歩むこと

そうした歩みこそが
ひとがひとであるということなのではないか





見えないじぶんがいる

見えないじぶんが見えたとき
どんな顔をすればいい

見たくないじぶんがいる

見たくないじぶんを見たとき
どんな顔をすればいい

見せたくないじぶんがいる

見せたくないじぶんを見せてしまったとき
どんな顔をすればいい

知らないじぶんがいる

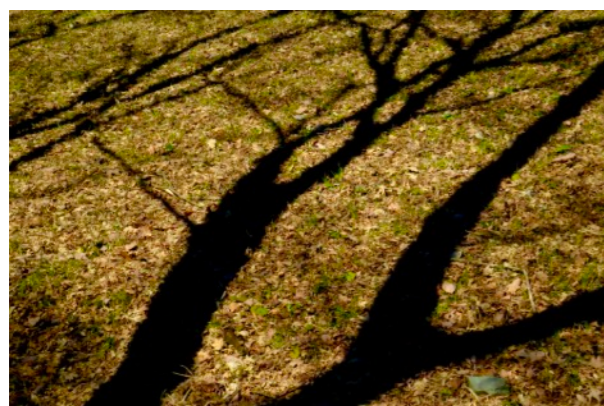
知らないじぶんを知ったとき
じぶんは変わるだろうか

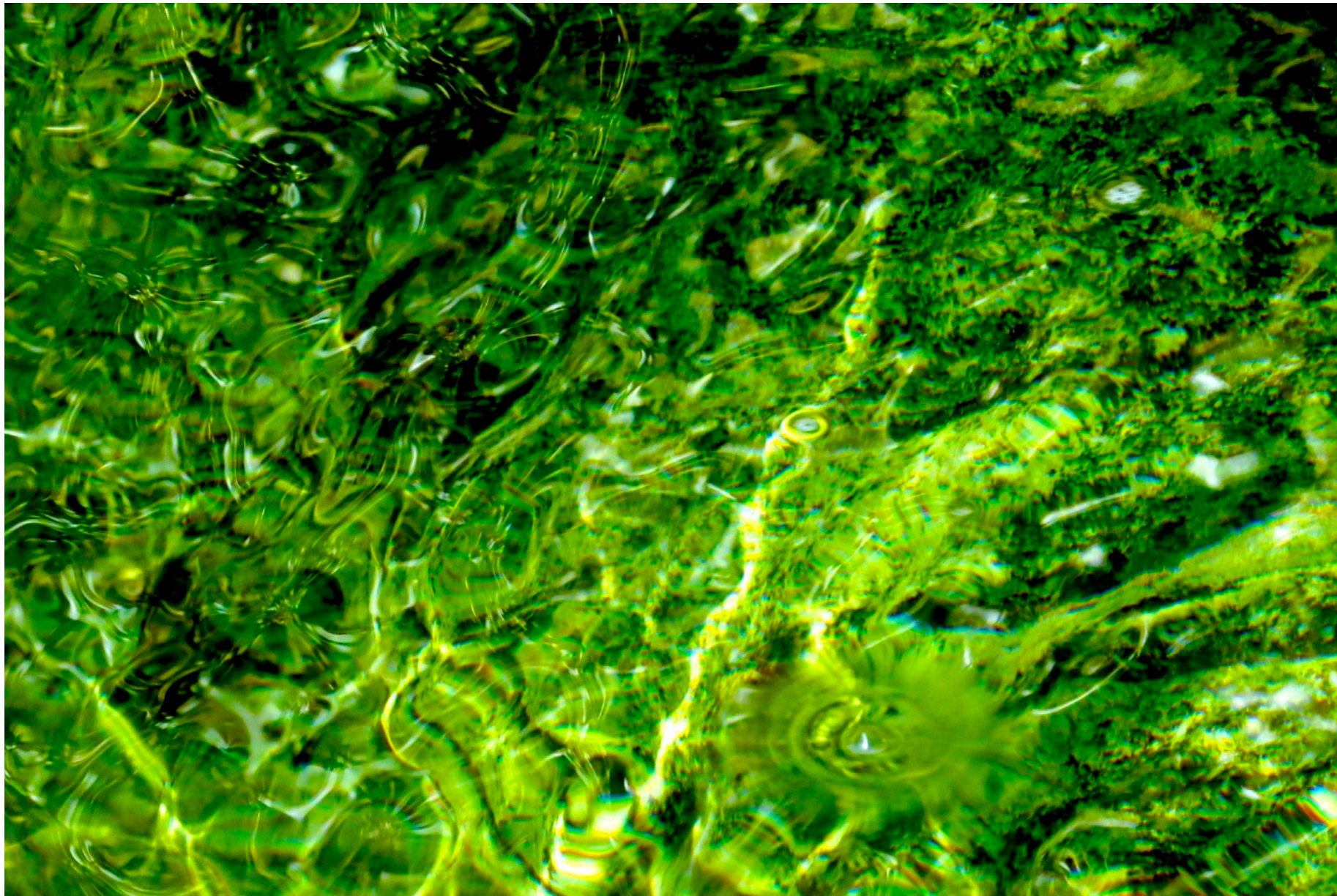
知りたくないじぶんがいる

知りたくないじぶんを知ったとき
じぶんは変わるだろうか

知られたくないじぶんがいる

知られたくないじぶんを知られてしまったとき
じぶんは変わるだろうか





色は
光の
受苦だから

世界は
色の環で
充たされようとするけれど

光は
その環の外で
なにかをうたってはいないか

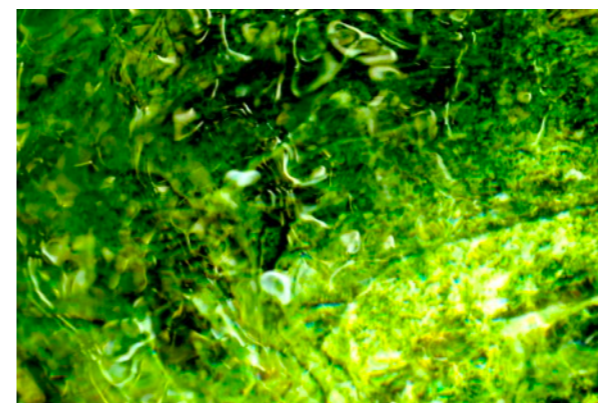
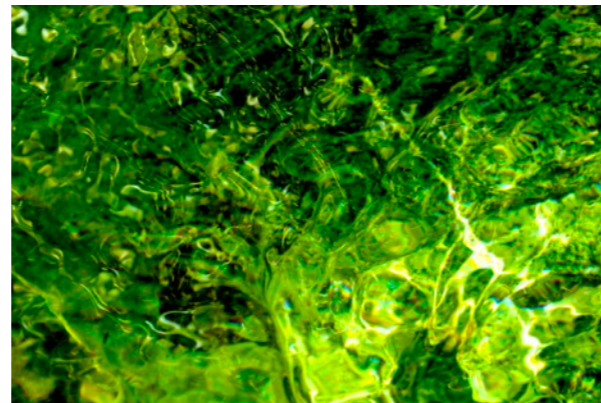
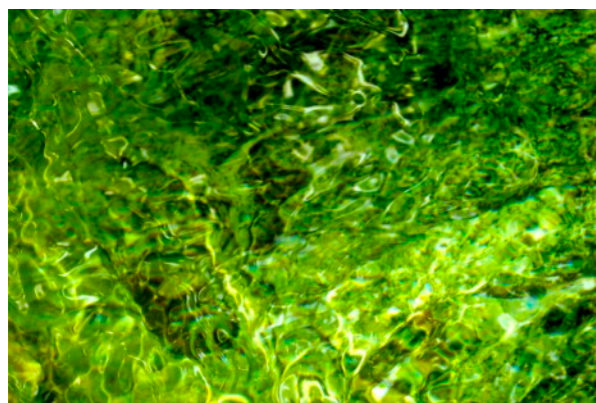
光よあれ
すると
光があった
その光が歌うように

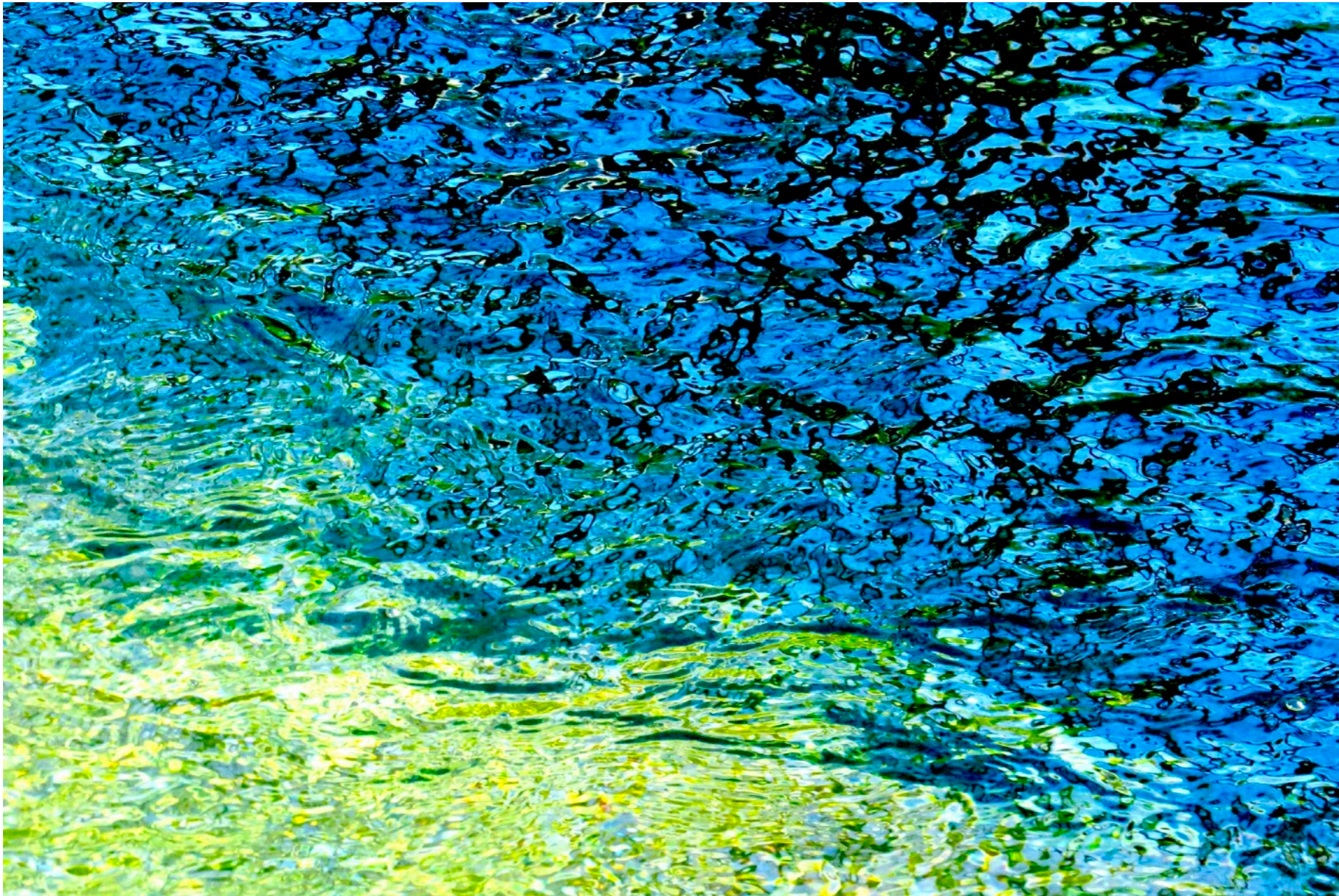
意味は
言葉の
受苦なのだろうか

だから
世界は意味で
充たされようとしているのだろうか

けれど
言葉は意味の外で
なにかを歌ってはいないか

言葉よあれ
すると
言葉があった
その言葉がうたうように





未知に出会うために
わたしたちは生まれてくる

未知の世界は
無気味で不条理だが

それにたえられず
ひとは未知を避け
教えられた道を歩くことになる

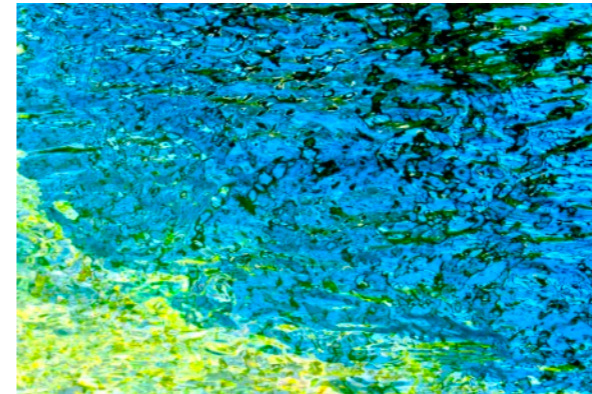
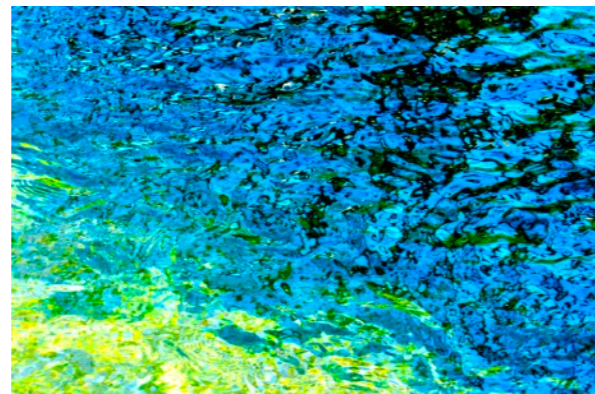
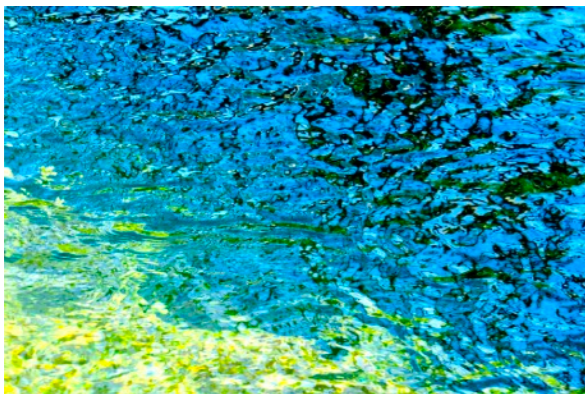
教えるということは
未知ゆえの驚きという
かけがえのない光を吹き消すことだ

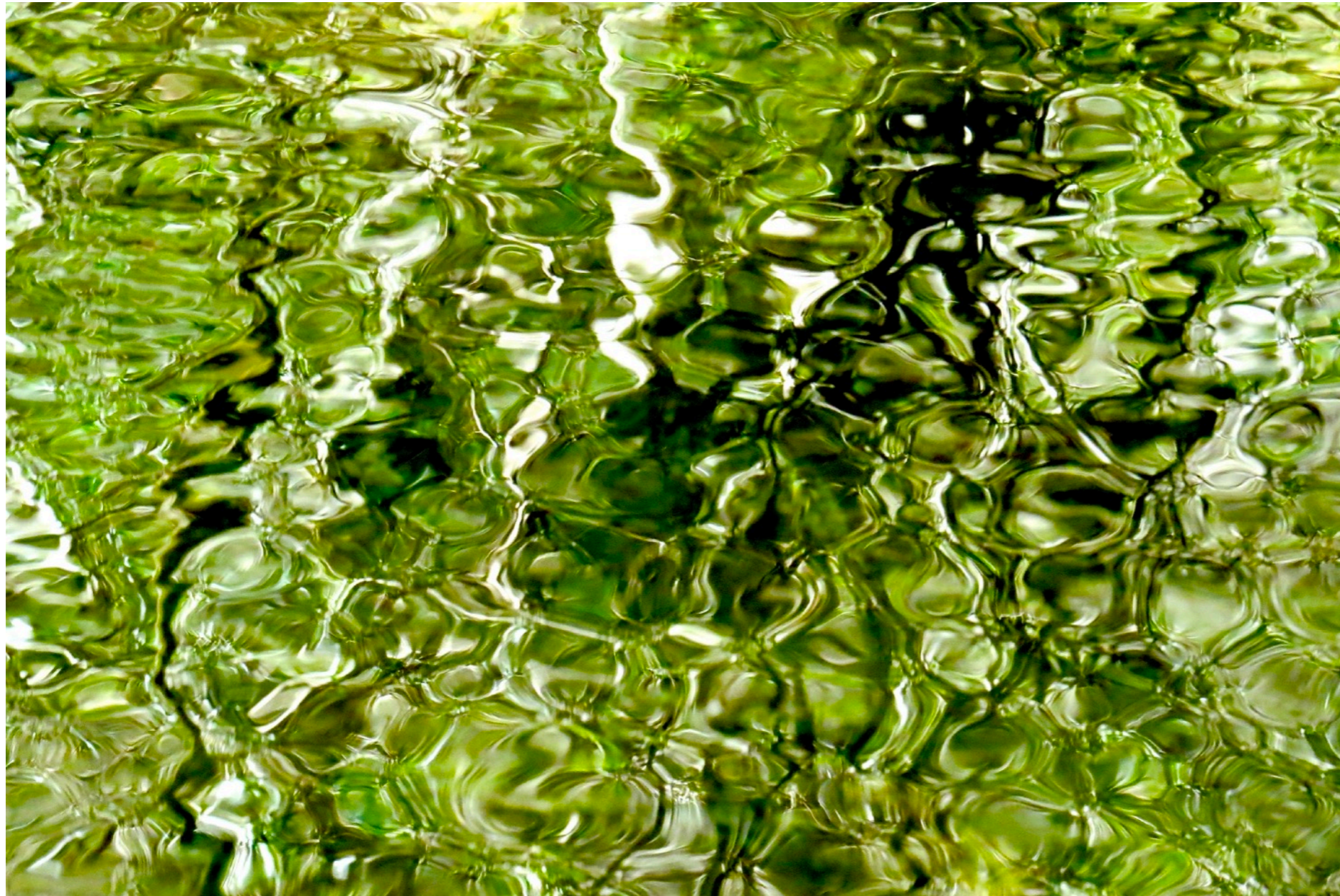
はじめてのものを
はじめてにしないよう
未知を去勢する仕掛けにほかならない

そのときはもう
知ることは
知ることではなくなっている

知るためには
未知とともに生きなければならない

未知に出会うために
わたしたちは生まれてくる





それがなにかを
見るためには
それだけを見ていても
見ることはない

その外にあるものを
見ることでしか
見えないものがある

それがなにかを
わかるためには
見ることだけでは
わからないことがある

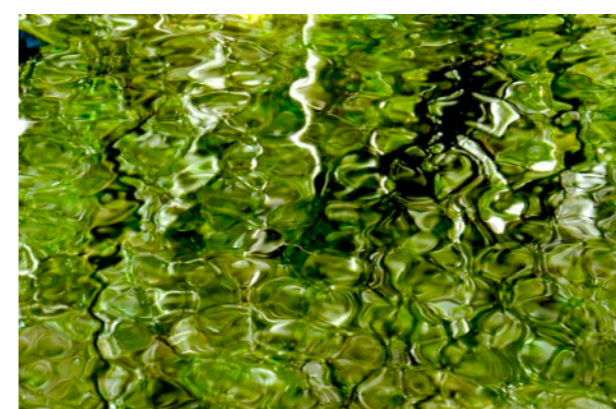
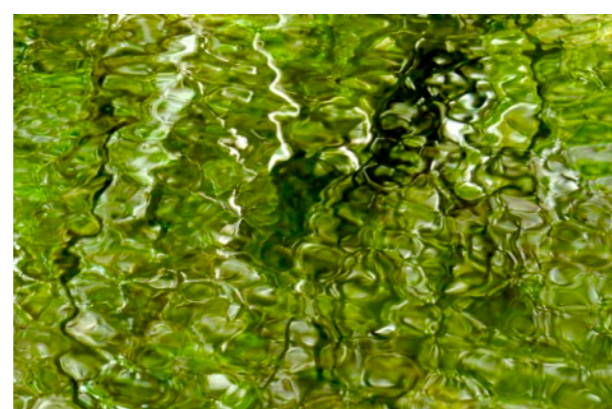
聞くことで
わかることもある
さわることで
わかることもある
匂うことで
わかることもある

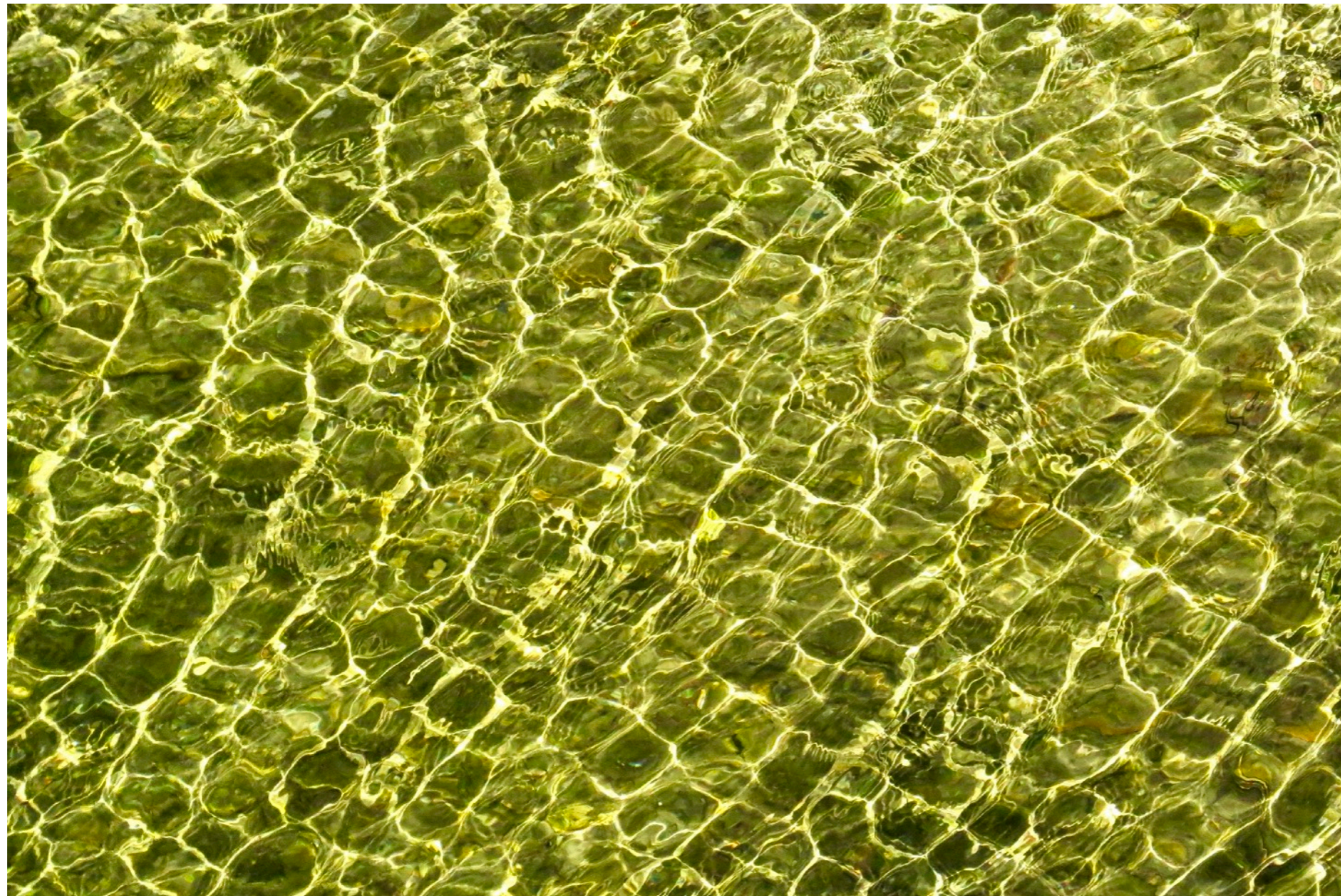
それがどうなるかを
推しはかるためには
今だけみても
推しはかれないかもしれない

過去のそれから
推しはかれるかもしれない
未来のそれから
推しはかれるかもしれない
時を超えたそれから
推しはかれるかもしれない

わたしがだれかを
知るためには
わたしがわたしであるだけでは
知ることはできないだろう

かつてわたしであったわたしから
知ることができるかもしれない
わたしでないわたしから
知ることができるかもしれない
わたしになるであろうわたしから
知ることができるかもしれない





私は
織物である

光の
そして闇の

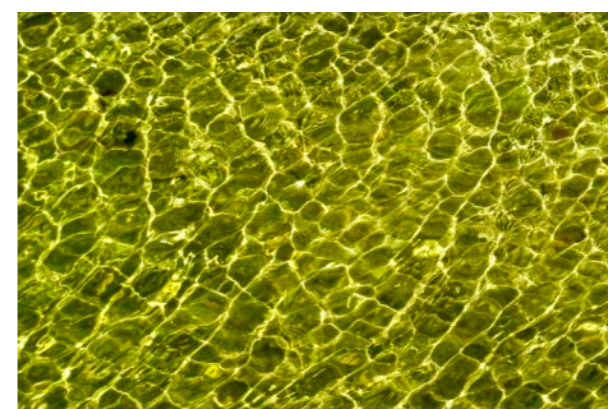
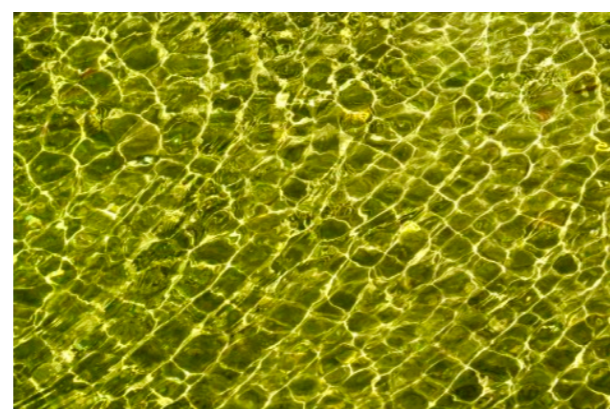
世界もまた
織物である

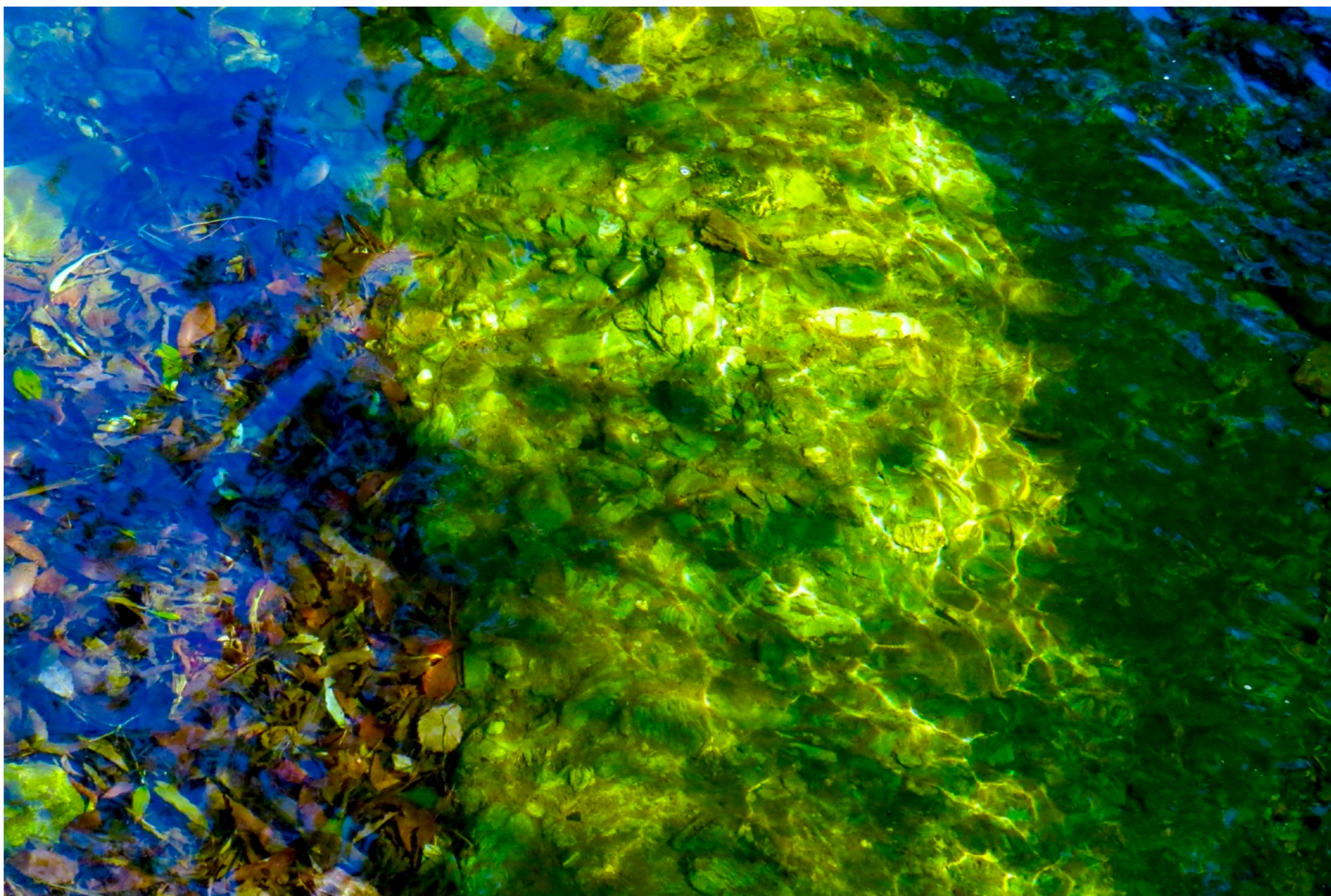
光の
そして闇の

光を緯糸に
闇を経糸に

織りなされ
描き出される
形と色の
インプロビゼーション

私と世界は
永遠のつかのまを
ともに戯れ続ける織物である





読むということは
そこに書かれていないことも
読みとらなければ
読むということにはならない

ある言葉が使われるとき
その言葉には
水面下の世界が隠されている

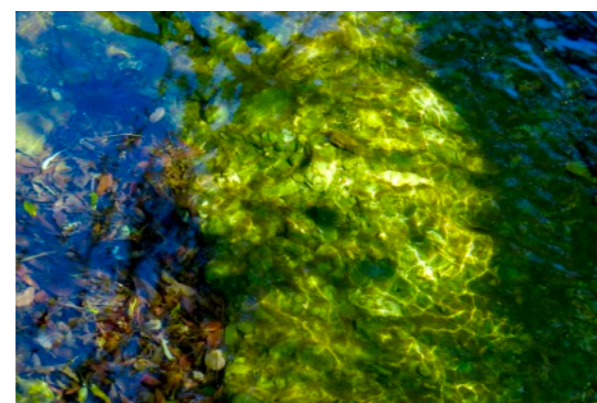
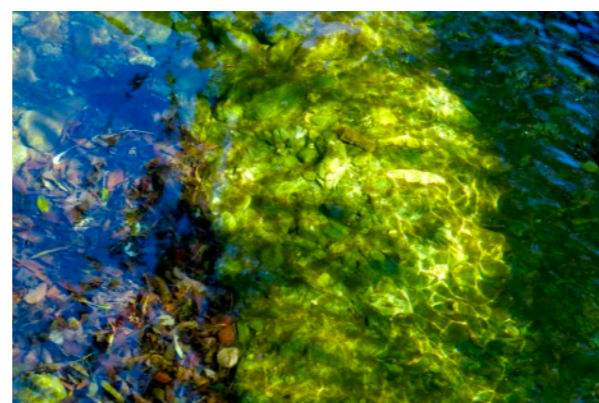
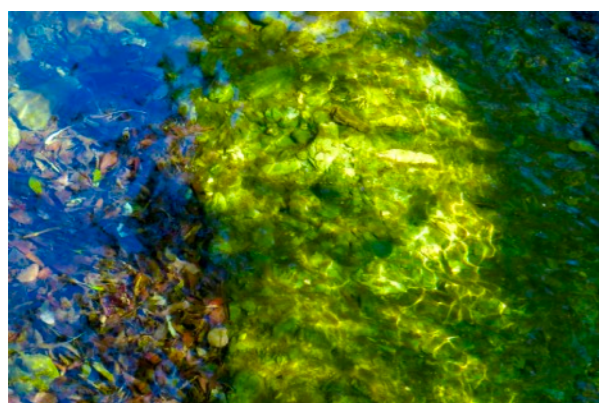
その水面下の世界が
書かれている言葉として
顕れているのだ

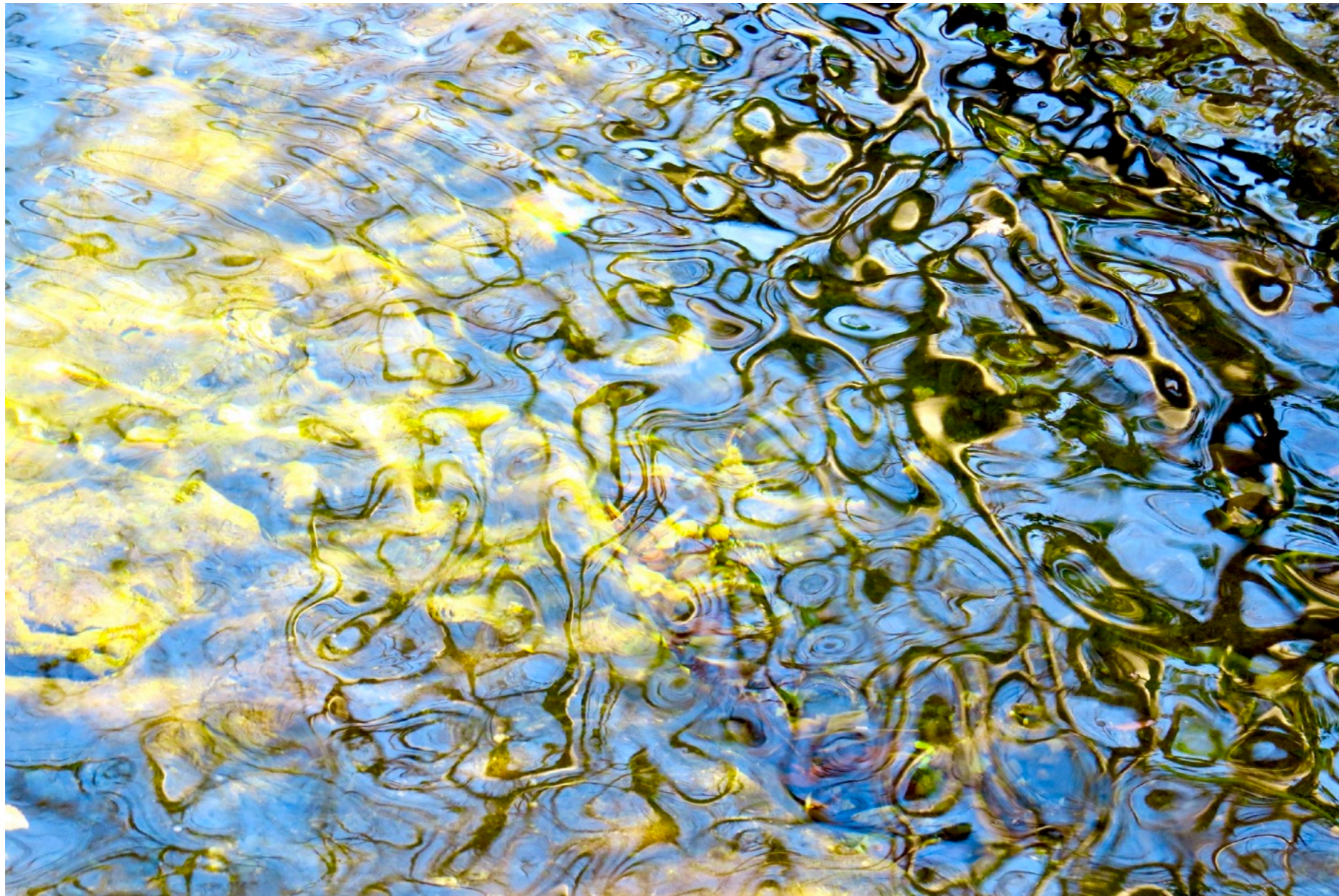
そのように
見ることも
考えることも
感じることも

顕れていないものが
それらを顕在化させている

そしてときには
それら顕在化しているものが
嘘だということもある

語ることが
騙ることもできるように





かたちは
リズムである
数を踊りながら
みずからを生ま出していく

言葉は
リズムである
世界を指さしながら
みずからを分節化していく

思考は
リズムである
内在平面を泳ぎながら
みずからを紡いでいく

自然は
リズムである
四大とともに遊びながら
みずからを生成させていく

わたしは
リズムである
こころとからだを繋ぎながら
みずからを歌っていく

